

主 題：ヘテ：神のことばと信仰者の姿  
聖書箇所：詩篇 119篇57-64篇

今朝は、詩篇119篇57節から64節を学んでいきます。

いつ、このように思い始めたのかよく覚えていないのですが、少なくとも、記憶する限り、私がずっと思っていることは、一人ひとりの真の特徴、その人が持っている本質というものは、その人が何らかの人生の中における困難にぶつかったときにはっきり見て取ることができるということです。それゆえに、いろんな問題が起こったときに、自分はどういうふうにならざるに立ち向かい、どういうふうにならざる中で生きていこうとするのかによって、自分がどんな人間なのかを知ることができると考えています。自分たちの人生がおもしろおかしく、何の問題もなく、安らかな状態であるときに、私たちが笑顔を身にまとっていることはそれ程難しいことではありません。いい顔をして「何も起こっていません。平気ですよ。」と言って生き続けることは、それ程難しいことではありません。けれども、私たちの前に様々な問題が起こって来るときに、私たちの真の姿、私たちの内側にある特徴が現われて来ます。

継続して、目の前にあり続ける様々な問題は、私たちがどのような存在かを、私たちに教えてくれます。突然、私たちの前に降りかかって来る困難、襲いかかって来る様々な困難は、私たちが人生において何を価値があるものとして生きるのか、それを教えてくれます。そして、それらの試練や困難やチャレンジは、私たちが外側につけている仮面を取り除き、自分たちがいったいどのような存在なのかをはっきりと教えてくれる訳です。皆さんは、自分がどんな人物なのか分かりますか？皆さんは、自分の持っている本質、自分の真の特質がどんなものかを知っていますか？皆さんが問題を抱えるときに、皆さんがチャレンジにぶつかるときに、それは皆さんがどんな存在なのか、皆さんがいったい何を価値のあるものとして生きているのかを知る、すばらしい機会ではないかと私は思います。

そして、それこそが、この詩篇の著者がこの詩篇の中で経験していたことだったのです。詩篇の中でも、最もすばらしい詩篇と言っても過言ではないこの119篇において、著者は私たちに何度も繰り返して、神のみことばがいったい何なのか、それがいったい、彼にとってどのような意味を持っているのか、そのことを教えてくれます。著者は、自分自身が持っているみことばに対する、慕う心、願い求める心、そして、このみことば、この聖書が彼の生涯にいったい何をしてくれるのか、彼の必要をどのように満たしてくれるのか、そのことを語り続けています。

そして、この第8番目の詩文節、57-64節で、著者は再び、神のみことばに焦点を当てる訳です。そして、そのみことばが彼にいったいどのような影響を与えたのか、彼自身の人生がどのようなものになるのか、彼自身の特徴がどんなものであるのか、その形成、形造りをしてきていることを教えてくれます。今朝、皆さんといっしょに私がしたいことは、この詩篇119篇57-64節に記されている八つの節で、この著者がどのような特徴を持つ者になったのか、聖書のみことばを、その神のみことばを信頼し、そのことばによって変えられている真の信仰者と言える、成熟した信仰者と呼ぶことができる著者が、どのような特徴を持っているのか、そのことを見ることです。

その特徴の中には、私たちが一般的に人間的に見て持つことがないような、そのような特徴を見て取ることができます。ある意味、不自然な、ある意味、超自然的な特徴が、この人物の内側に確かにあることを見て取ることができるのです。そして、私の心からの願いは、皆さんも、そして私自身も、信仰者として、成熟した信徒として、神のみことばを信じる者として、このような人物になっていくことです。また、神を知らない一人ひとりが、信仰を持っていない一人ひとりが、このような特徴を得ることができることを知り、そのような者になることを心から願うことです。

著者は次のことを私たちに教えます。みことばを読みます。119:57-64

- :57 主は私の受ける分です。私は、あなたのことばを守ると申しました。
- :58 私は心を尽くして、あなたに請い求めます。どうか、みことばのとおり、私をあわれんでください。
- :59 私は、自分の道を顧みて、あなたのさとしのほうへ私の足を向けました。
- :60 私は急いで、ためらわずに、あなたの仰せを守りました。
- :61 悪者の綱が私に巻き付きましたが、私は、あなたのみおしえを忘れませんでした。
- :62 真夜中に、私は起きて、あなたの正しいさばきについて感謝します。
- :63 私は、あなたを恐れるすべての者と、あなたの戒めを守る者とのともがらです。
- :64 主よ。地はあなたの恵みに満ちています。あなたのおきてを私に教えてください。

この8節の中で著者は、真の信仰者、成熟した信仰者がもっている特徴を五つ教えています。

## ☆真の信仰者、成熟した信徒がもっている特徴

### 1. 神を自分のものとしてもっている 57 a 節

相続財産として、神を自分のものとしてもっている。57節の初めに「主は私の受ける分です。」とあります。この「受ける分」、「私のものです」ということは、実は、前回見た56節にすでに記されていることでした。そこには「これこそ私のものです。私があなたの戒めを守っているからです。」と書かれていました。前回話したように、この個所は「私のものは何なのか」と言って、それが「あなたの戒めを守ること」であると教えていました。「あなたの戒めを守ることが私の受ける分なのです。私のものです。」と言ったのです。

様々な困難、試練、実際に、この詩篇の著者は迫害の中にあつて、人々が彼をあざけり、彼の前に企てを立て、彼を滅ぼそう、彼を殺そうという、そのような計画を立てる中で、著者は「神が私に与えてくださっていることは、神のみことばを守ることだ」と言ったのです。そして、ここで著者は、そのことをさらに進めて、「いや実は、私の受ける分は神ご自身です」と言うのです。ここでは、著者と神との非常に近い関係が明確に記されています。「神は私のものです」と言うからにはそれなりの近い関係がないといけないのですが、彼はここで「私の受ける分、私のものです」と言っています。そこに非常に近い関係を見ることができるのです。

さらに、「受ける分」と訳されていることばを注意深く調べると、旧約聖書全体の中でも、このことばは非常に重要な、神学的にも深い意味を持ったことばであると見て取ることができます。このことばは元々、財産を相続するとか、何かの所有物を自分のものとする、得ること、そのことを表わして使われることばなのですが、なぜ、これが神学的に重要なことばであるのかというと、実はそれは、旧約聖書の中で、イスラエルの民が約束の地であるカナンの地に初めて入って行くときに与えられた一つの約束のゆえなのです。皆さんがご存じのように、イスラエルの民はエジプトを出てカナン、今のイスラエル、パレスチナですが、そこに入って行く旅を続けました。そこに入って行くに当たって、それぞれの部族に土地を分けました。12の部族に約束の地が分割されたのです。そのときに、実は、一つの部族だけ土地を得なかったのです。それは祭司として定められたレビ族でした。彼らには土地が与えられなかった訳です。土地が与えられなかったけれども、彼らはそこに住むことが求められたのです。そして、レビ族たちに対して神はこのように言われました。「主はまたアロンに仰せられた。「あなたは彼らの国で相続地を持つてはならない。彼らのうちで何の割り当て地をも所有してはならない。イスラエル人の中にあつて、わたしがあなたの割り当ての地であり、あなたの相続地である。」と。ここで神は、他の部族たちが約束の地に自分たちの相続財産として実際の土地を得ていく中で、レビ人たちに対して「あなたたちは土地は所有しません。」と言ったのです。でも、彼らはそれよりもはるかにすばらしいものを自分のものとして受け取ることができる、それは「わたし自身だ」ということを言っているのです。

ある注解者はこの個所を観察して、このように正しくコメントしています。「詩篇119篇57節で『主は私の受ける分です。』と言って、古くから伝えられているレビ人に語られた約束を思い起こさせる文章を用いることによって、詩篇の著者は、彼自身が持っている様々な必要を神に依存することができることを教えている。自分たちが所有している土地に依存するのではなく、彼らが持っている必要を神が備えてくださる、与えてくださるということを教えている。」と。つまり、ここで著者が言わんとしていることは、神が私たちの必要を満たすのに十分な方であるということです。土地を持っていようが持っていまいが、著者は「神は私の所有物です。私の受ける分であり、神は私の必要を備えてくださる。」と言うのです。

イスラエルの民に与えられていた土地は、彼らがその場所を耕しそこから得ることができる様々な資源をもって生計を立てていました。けれども、レビ人たちは土地を持っていなかったゆえに、彼らは自分たちの日常の必要も様々な実際的な必要も得ることができなかったのですが、神がそれらを与えてくださるから、神が相続地だという約束があったのです。

同じように、詩篇の著者は様々な困難を抱える中で、問題を持っている中で、自分がどのような状況にあつたとしても、神が私の受ける分であり、その神を所有しているがゆえに、自分に必要なものを神が備えてくださるのだということを私たちに言わんとしたのです。これと同じことばが、詩篇の他の箇所でも何度も使われています。たとえば、ダビデは詩篇16:5で「主は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。あなたは、私の受ける分を、堅く保ってくださいます。」と言っています。どんな状況の中にあつても、あなたは私を支えてくださると言うのです。また、アサフは詩篇73:26で「この身とこの心とは尽き果てましょう。しかし神はとこしえに私の心の岩、私の分の土地です。」と言っています。自分のもっているこのからだも様々な必要も、尽き果ててしまうときがあるかもしれないけれど、神は永遠に私の必要を満たすことができる方だと言います。また、ダビデは詩篇142:5で「主よ。私はあなたに

叫んで、言いました。「あなたは私の避け所、生ける者の地で、私の分の土地です。」、私が困ったときに、私はあなたの元に逃げることができる、なぜなら、あなたは私に必要を備えてくださる私の所有物だからですと言うのです。最も大胆な人物はエレミヤかもしれません。彼は哀歌の中でこのように言います。3：24「『主こそ、私の受ける分です。』と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。」と。エレミヤがこの哀歌を書いたときは、バビロニアがエルサレムにやって来て、エルサレムを滅ぼし、彼が愛して止まなかった神殿は崩れ去ってしまいました。人生の中で、これ以上ない程の困難の中にあって、事実、これ以上経験したことのない悲しみの中にあって、エレミヤは「私の受ける分は神です。だからこのような悲劇の中で、このような絶望の中で、私は神を待ち望む。」と言います。なぜなら、神が備えてくださるからです。神は、このような悲しみ中でもエレミヤが前に進んで行くことが出来るように助けを与えてくださるからです。神はエレミヤが抱えている一つひとつの必要を知って、それに相応しいものを与え続けてくださることを知っているから。だから、彼は言うのです。『主こそ、私の受ける分です。』と。

信仰者の皆さん、詩篇の著者は言うのです。「私たちはこんなすばらしい神を私たちのものにしていく。」と。イギリスの非常に有名な説教者だったスポルジョンは、このようなことを言いました。「賢い人物であるならば、目の前にあらゆるものを与えてくださる神がいるのに、その方を選択しないことがあるだろうか。」と。いろんな問題を抱えていて、どうしたらいいのか分からないときに、目の前にすべての祝福を与えてくださる神がそこで待っていると言うのです。その神が手を差し伸べて「わたしの祝福を受けなさい。」と言ってくださっているにも関わらず、どうして私たちはその手を取らないのかと言うのです。少しでも知識をもっていたら、少しでも理解をもっていたら、間違いなく、すべての必要を与えてくれる神がそこにいるのに、その方の手を取らないことなど考えられないと。著者はよく分かっていたのです。この地上のあらゆることは自分に必要なものを備え続けることはできない。それができるのは神だけだと。そして、そこにある祝福を知っているゆえに、彼は喜んで言うのです。困難の中で、周りに敵がたくさんいる中で、人々が嘲笑っている中で、人々が彼のいのちを狙っているいろんな計画を企てている中で、「主は私の分です。」と。

私たちはいろいろな所で自分たちの痛みや悲しみを取り除くために必死になっています。取り除くものを捜します。その結果、私たちが内側にガンがあって問題を抱えているにも関わらず、それに絆創膏を貼って痛みを忘れようとするのです。骨折をしているのに骨を継ぎ合わせることをせずに、痛み止めだけを飲んで、何とかなるだろうと思うのです。問題の本当の解決は、神しかもたすことができないことを知っていながら、私たちは神を選ぶのではなく、他の事柄を一生懸命捜して、少しでも気を紛らわそうとするのです。ある人たちはそれを人間関係に求めるでしょう。親しい友人に相談することによって何とかなるだろうと考えるかもしれません。ある人たちはお酒に逃げるかもしれません。お酒に酔ってしまえば嫌なことを忘れることができるからと。でも、次の日に思い出します。忘れてはいなかったのです。また、ある人たちはいろいろな快樂にその問題の解消を求めます。でも、そこに常に付きまとうのは虚しさだけです。なぜなら、問題は解決していないからです。忘れようとどれだけ努力しても、忘れることができないことを分かっているながら、私たちは虚しく問題の解決がないところに、問題の解決を見出そうとするのです。

でも、詩篇の著者は言うのです。「神は私の受ける分です。この神は問題に必要な十分な助けを与えてくれる。その方は私に必要を備えてくださる方だ。」と。クリスチャンである皆さん、あなたは必要に目を向けていますか？それとも、その必要を満たしてくださる神に目を向けていますか？皆さんは、問題の解決を急ぐ余りに、様々な人間的な手法を凝らして、何とか痛みや悲しみ、苦しみや問題を忘れ去ろうと努力しませんか？それとも神が自分の受け取る分であり、神の恵みが自分に十分であり、自分の弱さを補って余りあるものであることを確信して、主に目を向け続けていますか？真の信仰者はそのようにするのです。必要を理解しているときに、問題を抱えるときに、神がそれを解決できることを知っているからです。

## 2. 神のみことばを守る 57b—58節

彼はここでまず最初に、自分の決意を宣言し、そして、自分がいかに足りない者であるか、それができない者であるかを知っているがゆえに、主の前に懇願します。祈り求めるのです。

### 1) 決意 57b節

57節の後半を見てください。「私は、あなたのことばを守ると申しました。」と、彼の決意が宣言されています。ここで著者は、以前にした約束を話しています。私は神の前にこのように約束したのですと。神と初めて関係をもったときに、神のことを知り神がいかにすばらしい方であるかが分かり「私は神に従って行きます。あなたを信じます。あなたに付いて行きます。」とそのように誓った日の約束を思い

出すのです。そのことをもう一度宣言するのです。「あなたのことばに従います。あなたのことばを守ります。」と。神を信じる者には当然のことですね。神は正しい方だから、神が言われることはすべて正しいから、救われているなら、私はその正しいことをして生きていくという宣言をしたはずなのです。著者は「あなたのことばを守ると申しました。」と言いました。それはいつのことですか？過去においてその約束をしたのです。そして、今それを思い出してもう一度告げているのです。つまり、私がした決意は今も変わっていませんと言っているのです。以前言った通りに、私はそのことを思っています。私はあなたの前に約束を守り続けていきます。あなたのみことばを守っていきます。それをしたいのですと。

皆さん気付いてください。彼が言っていないことは「私はあなたのみことばを守らなければなりません。」ではありません。むしろ、「守ると申しました。」と言って、彼が心の中で思っていることは「私はあなたのみことばを守りたくてしようがないのです。」です。そのことはこの後でも見ることができますが、なぜ、クリスチャンが、神を信じる者たちが神のみことばに沿って、聖書に沿って生きていきたいと願うのか、それはしなければいけないからではありません。「無理矢理、強制的に、この信仰をもったからこのようにしなければいけないのです。嫌々だけどします。」ではありません。したいのです。なぜですか？ダビデはこのように言いました。神のみことば「それらは、金よりも、多くの純金よりも好ましい。蜜よりも、蜜蜂の巣のしたたりよりも甘い。」と（詩篇 19 : 10）。「神のみことばは私にとってこれ以上ないほど価値のあるものだ。神のみことばほど慕わしいものはない。私が願い求めるものは他にはない。」と言っているのです。

実は、この 119 篇の著者も同じことを言います。119 : 127 「それゆえ、私は、金よりも、純金よりも、あなたの仰せを愛します。」、彼は神のみことばに価値を見出すのです。彼は神のみことばが正しいことを知っていたのです。神のみことばが彼の人生を導くに足るものであることを知っていたのです。彼は神のみことばが彼にとって最も宝と考えるべきものであることを分かっていたのです。だから、彼はそのみことばを守りたいという願いをいつも自分の心の近くに置いていました。そして、それを守ろうと生きていたのです。

成熟した信徒は、真の信仰者は神のみことばが何よりも慕わしいはずで、それを追い求めていきたいと心から願います。それを守りたくてしようがないのです。私たちも同じ告白をしているべきです。

## 2) 懇願 58 節

著者は「守りたい」とその決意をし、その献身をしていると言いますが、同時に、彼は自分がいかにそれを守ることができない弱者であることを知っているのです。だから、神の前に懇願するのです。58 節を見てください。「私は心を尽くして、あなたに請い求めます。どうか、みことばのとおり、私をあわれんでください。」、彼は「私はあなたのことばを守ると言ったのですが、私はそれができないのです。努力しても足りないところしか見えません。あなたのみことばの通りに生きようとするけれども、私は失敗ばかりします。だから、私は心から自分の心のすべてをもってあなたの前に出て行きます。そして、お願いします。今すぐにそれをしてください。」と、そのような願いがこのことばに見て取ることができるのです。

彼は言います。「どうぞ神さま、私をあわれんでください。私がああなたのみことばを守ることができるようにしてください。」と。これは彼が切羽詰まった状況の中で、今すぐにこのあわれみを与えて欲しいという願いを、原文では見ることができます。使われていることばがそのようなことを表現します。つまり、彼は自分がやっていきたいと心から願っている「神のみことばを守る」という生き方が出来ないことを知っているがゆえに、何とか神に助けて欲しいと考えているのです。どうでもいいと思っていたら、そのようには思わないではないですか？願う必要はないですね。守っても守らなくてもどちらでもいいと言うなら、こんなに一生懸命、熱心に「すぐに助けてください」とあわれみを請う必要はないのです。でも、彼は何よりもそのことをしたいと願っているゆえに、その思いで満ち溢れて心が張り裂けそうになっているがゆえに、神の前に出て行って「どうぞ、あなたのみことばを守ることができるようにしてください。」と、そのように願うのです。

皆さん、彼の置かれていた状況を思い出してください。周りには敵がいたのです。彼はあざけられ、人々は彼の前に企みをし、彼をその地位から追い出し、彼のいのちをも狙おうとしていたことが、この詩篇 119 篇の文脈を見れば分かります。そのような状況の中で、彼が切迫して神に何を求めたと思いますか？「私をあわれんでください。私がああなたのみことばを守ることができるように。」と言います。皆さんなら何を願いますか？私だったらきっと「助けてください」と言います。人々が私を見て笑わないようにしてくださいと祈りませんか？どうぞ、この危険から私を守ってくださいと願いませんか？

でも、著者がこの切羽詰まった中で、今すぐに何よりもして欲しいと願ったことは「神さま、どうぞ、あなたのことばを私が守ることができるようにしてください。」です。彼は確信をもってそのことを祈っています。だから、「どうか、みことばのとおり、」と言います。神はそうにしてくださいと言っているのです。聖書は教えます。神の前にへりくだる者には神は恵みを授けてくださると。「私はできるのです」と言っている者たちには、神は「どうぞ、やっpegらんなさい」と言います。「できないことに気付きなさい。」と。でも、自分の力では何一つできないことに気づき、自らへりくだる者に対して、神は恵みを与えてくださるのです。だから、詩篇の著者は、自分がいかにできないのかを知って、神の前にへりくだるのです。「主よ。どうぞ助けてください。あわれんでください。」と。

「神が自分の分だ」と言うことができる者たち、「自分の受ける分だ」と宣言する者たちは、神のみことばを守りたいという決意の元に生きています。その者たちは、神のみことばを守ることの重要性和、自分がいかにそれができない者であるのかという現実をよく分かっているのです。そして、主の前にひたすら請い求めるのです。「どうぞ、神さま、私を助けてください。私がおんなのような生き方をすることができるようになってください。」と。

これが皆さんの特徴ですか？皆さんは、何よりも主のみことばを守って生きたいと願っていますか？それが正しいがゆえに「どうしてもそれがしくてしょうがない。」と言っていますか？それができない自分を見たときに、神の命令を完全に正しく守ることができない自分を見たときに、皆さんは主の前にへりくだって「主よ、どうぞ守らせてください。」と請い求めますか？詩篇の著者は、そういう人物だったのです。真の信仰者、成熟した信徒は、そのような特徴をもっていたのです。

### 3. 自分の生涯を変える 59-60節

成熟した信徒は、自分の人生が主に喜ばれるものによって変わって行くように生きています。生涯を変えていこうとするのです。そのことが59-60節に記されています。そして、著者はそのことを三つの、非常にシンプルな、簡単なステップを通して教えています。いかに彼が変わろうとしていたのか？「私は、自分の道を顧みて、あなたのさとしのほうへ私の足を向けました。:60 私は急いで、ためらわずに、あなたの仰せを守りました。」

#### 1) 吟味する

1番目のステップは、59節「私は、自分の道を顧みて、」と、彼は立ち止まってじっくり考えたのです。ここで彼が言っている「道」とは、今まで話して来たように、彼が生きているその方向、彼が生きている生涯の形です。彼が生きようとしているその道、進んで行く、歩んで行こうとする方向です。彼の生涯を反映したその道です。彼は人生のあらゆる所において立ち止まって、自分がどの道を、どこに向かって歩んでいるのかを考えたのです。「顧みて、」とは「思う、考える」ということばがここで使われています。つまり、信仰の成熟した人は人生を何となく生きていかなければいけません。ただ何となく、流れに沿って生きていくことをしないのです。彼は立ち止まって、その都度、その都度、自分の生きている道がどんな道なのかをよく考えるのです。そのようにして、本当に自分が正しい道を通っているのかを吟味し、そして、進んで行く道を確認するのです。でも、それは単なる知的な頭の中だけのことではありませんでした。それは実際の行動に現われるのです。

#### 2) 悔い改め

それが2番目のステップです。「悔い改め」という形で現われます。変化が起こるのです。「私は、自分の道を顧みて、あなたのさとしのほうへ私の足を向けました。」とあります。彼は悔い改めているのです。自分の道を吟味し、自分がどこに進んで行くのかということ考えたときに、彼は自分が進んでいく方向と、神が自分に進んで行きなさいと言っている方向を考えて、神の道と外れているところを自分が歩んでいるならば、自分の足の向いている方向を神が望んでいる道に変えるのです。向きを変えるのです。方向転換をするのです。彼は自分の間違った道を悔い改め、神の望んでいる喜ばれる道へと歩みを進めようとするのです。

「私はあなたのことばを守る」と言っていました。だから、神に祈りました。「どうぞ、あわれんでください。私ができるようにしてください。」と。そして、自分の進んで行く道考えたときに、それが神の言っている道と違う道を進んでいたとするならば、彼はそのことをよく考えて、「これはいけない。これは間違っている。だから、私はその歩みを変えるのだ。」と言ったのです。悔い改めです。

詩篇の著者は、このように言いました。詩篇1:1-2「幸いなことよ。悪者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。:2 まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ。」、だから、この人物は、進んでいる道が神が進めと言っている道と違ったときに、継続的にその道を歩んで行こうとはしないのです。方向を転換しようとするのです。ダビデが祈るように、詩篇139:23-24「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩い

を知ってください。:24 私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」と、これが著者の願っていたことです。これが著者がしたかったことなのです。だから、彼は自分の進んで行く道をよく考え、そこに相応しくない道を見いだしたときに、悔い改めて、新しい道に歩んで行こうとするのです。

### 3) すぐに行動に移す

3番目のステップは、急いでそのことをするのです。急いで行動するのです。別の言い方をすれば、彼は怠け者ではないのです。60節「私は急いで、ためらわずに、あなたの仰せを守りました。」と。私たちが一番弱いところはここかもしれません。私たちは自分が進んでいる道を考えることをします。そのようなことを示されるときはたくさんあります。そして、よく考えたときに、今自分が進んでいる道が正しいのかどうかを考えたときに、聖書の教えを通して、それが間違っていることに気付かされるのです。「ああ、これではいけない。変わらなければいけない」と考え思うのですが、その後、1週間経ち、2週間経ち、3週間経っても、まだ、実際にその行動を取らないことがあります。彼はなぜ「急いで、ためらわずに」と二回も言うのでしょうか？何が強調されているのでしょうか？著者が強調していることは「私はもう気付いたその瞬間に、一切のためらいを持たず、神の前に正しいことをしたいのです、します！」です。どうですか？皆さん、皆さんはそのように急いで、ためらわずに神に従いますか？真の信徒は怠惰な者ではないのです。真の信徒は怠けないのです。真の信徒は神に罪を示されたとき、すばやく行動するのです。

間違いなく、私が確信していることは、ここにいらっしゃる皆さんには罪があるということです。皆さんがどれ程、「私は神に喜ばれる生き方をしたい！」と願っていたとしても、神に喜ばれる生き方をしていないところがあるのです。皆さんが持っている具体的な罪が何なのか私は知りません。でも、皆さんはよくご存じです。多分、今、皆さんがそのことに思いを巡らすときに、神がきっと皆さんの心に何らかの罪を示してくださっているでしょう。「なぜ、正しくしていないのか？わたしはこのように命じているでしょう？」と。私の心からの願いは、自分自身にも同じように言うことですが、そのように神が責めてくださっているときに、私たちがすぐに、急いでためらうことなく、行動を取ることです。正しい方向へと足を進めていくことです。成熟した真のクリスチャンは、それをするのです。

皆さんは自分の道を吟味しますか？自分の歩んで道が正しいものだと分かっていますか？そこに傷のついた、神に喜ばれない、正しくない道がありませんか？その道を歩んでいませんか？もし、そうなら、皆さんは、今すぐに悔い改めるべきです。なぜなら、皆さんが今すぐに悔い改めなければ、今すぐにも、神は皆さんの前にさばきをもたらすことができる方だからです。

### 4. 神様の律法を覚えている 61-62節

神のみことばを忘れないのです。これも私たちが多くの時に十分にできていないことです。ここで詩篇の著者が言っていないのは「みことばを暗唱しなさい。」ということです。「あなたはどの位、神のみことばを覚えていますか？」ということではありません。それも含まれているかもしれませんが、言わんとすることは、聖書に書かれているみことばを一言一句覚えているということではありません。彼が言わんとしていることは、私たちがあらゆる状況の中で、特に、自分たちが困難な状況にいるときに、神が教えていること、神が真理として示してくださっていることを、常に覚えているかどうかです。それを忘れていないかどうかです。私たちはまさにそれと反対です。いつも忘れています。神がどのような方か、神が何を為そうとしているのか、そのことを知っていると言いながら、私たちはいろんなときにそのことを忘れているのです。

61節にこのようなことばが記されています。「悪者の網が私に巻き付きましたが、私は、あなたのみおしえを忘れませんでした。」、分かりにくい表現が使われていますが、簡単に説明するならば、敵の、悪い者たちのわなが私の周りにたくさんあると言うのです。網が張られていて網が張られていて「私はどこを歩いても、すぐにそこで捕らわれてしまうような状況に置かれている」のです。実際、この詩篇の中にはそのような状況が多く記されています。旧約聖書全体の中で、このことばがどのように使われているのかを考えたときにも、このように理解すべきであることが分かります。つまり、彼は「私は今たくさんわなかの中で、どのように生きて行けばよいのか分からないような状態に置かれています。」と言っているのです。一歩踏み出したら、そこで捕えられてしまうような状態に置かれていますと。そのときに彼は、「でも、私はあなたのみおしえを忘れません。それを覚え続けています。」と言います。

皆さんはどうですか？自分の周りに敵がいて、自分のことを嫌う人たちがいて、その人たちが自分にいろんなわなを仕掛けています。そのことをいろんな人たちから耳にしたり、それを見ながらきっとそうではないかと感じているのです。そのようなときに皆さんの内側にあるのは何でしょう？きっと、恐れであったり、怒りではありませんか？でも、この著者はそうではなかったのです。私たちは人

生が困難な局面に向かうときに、その困難な状況に目が向いてしまいます。そして、私たちはその困難な状況だけを考えるようになってしまって、それゆえに、そこから抜け出すことが出来なくなってしまいます。神がどんな計画を持っておられ、神がどんな働きをしておられるのかを忘れ、私たちは自分の目の前で起こっている事柄に過度に敏感になって、間違った応答をし続けるようになります。

私たちは神のみことばを忘れるのです。神のみことばを、神の教えを最も覚えていなければいけないときに、私たちは神のみことばから目を離すのです。皆さん、神のみことばは私たちの人生に正しい見解を与えます。起こっている事柄をどのように捉えるべきかという正しい見識を聖書は示してくれるのです。そのときに私たちは、神が見ておられるその目をもってすべての事柄を見ることが出来るようになります。ヨセフは何と言いましたか？父であるヤコブが死んで、自分を陥れた兄弟たちが自分のところにやって来たとき、兄弟たちは「殺されるのではないか、ひどい目に会うのではないか…」と心配して、「私たちはあなたのしもべです」と言ってヨセフの前にひざまづいたときに、ヨセフはこのように言いました。「:19 恐れることはありません。どうして、私が神の代わりでしょうか。:20 あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。」（創世記50：19－20）。ヨセフは兄弟たちに売られましたが、エジプトで奴隷として生きていました。そこですばらしい働きをしていたにも関わらず、彼は無実の罪で牢屋に入れられて、その中でも忘れ去られて、何年も何年も苦い思いをしながら生活し続けて来たのです。でも、彼は言うのです。「あなたたちは悪を計ったけれど、主がそれを善にしてくださった。」と。ヨセフは神のみことばを覚え続けたのです。神がどのような方か、神が何を為そうとしておられるのか、そこから目を離さなかったのです。だから、彼は常に、神の目をもって、自分の周りに起こっていることを捉えることが出来たのです。詩篇の著者も同じです。「私は、あなたのみおしえを忘れませんでした。」

このように敵に囲まれている状況の中で、彼は、62節「真夜中に、私は起きて、あなたの正しいさばきについて感謝します。」と言います。彼は感謝したのです。皆さんに敵がいることに関して、皆さんの周りにわながたくさんあることについて感謝したのはいつですか？彼はしたのです。なぜなら、神がみことばから正しく悪者に対するさばきを与えることを教えているからです。自分で何かをする必要はなかったのです。自分自身を守る必要もなかったのです。神が正しく彼らに対して罰を与えることを知っていたからです。彼はそのさばきについて感謝することが出来たのです。

夜、一人で思い悩み、眠れない時間を過ごしていたときに、彼はふと立ち上がって「神さま、ありがとうございます。」と言うのです。この困難があっても、この問題が私の前にあったとしても、どんな苦しみがあっても、私はあなたに感謝することが出来ます。なぜなら、あなたはこのことを通して、あなたの目的を果たそうとしているから、私はそのことを知っているからと、真の信仰者はそれをします。神のことをよく分かっている人たち、神のことを忘れないでいようとする人たちはそのことが出来ます。

## 5. 神の恵みを見る 63－64節

真の信仰者であり、成熟した信徒は神の恵みを見るのです。見出すことが出来るのです。63－64節にそのことが記されています。63節では、彼に与えられている交わりについて、友たちについて、そして、64節では、被造物すべてが神の恵みを見て取ることを教えています。

### 1) 神の恵みを信徒との交わりに見る 63節

思いませんか？困難な状況の中で、慰めや励まし、希望を見つけることは難しいことではないですか？確かに、神に信頼を置くことが出来ることも分かっているし、確かに、神が助けてくださって、そこに希望を持つことが出来ることもよく分かっているのです。でも、実際に、具体的に、毎日の生活が苦しいものであり続けるならば、私たちの心はどこかで萎えてしまうことがあるではないですか？具体的な助けを見たい、具体的に励ましが得たいのです。概念的なものでなくて、もちろん、信仰にはそれがなければいけないのですが、それと同時に、毎日の生活をしていく上で助けとなる何かが必要であると思うではないですか？詩篇の著者が言うことはまさにそれです。悲しんでいるときに、苦しいときに、困難な中を通っているときに、だれも私の味方ではないと思うときに、彼は何を捜すのですか？どこに恵みを見出すのですか？自分の友に恵みを見出すのです。

63節「私は、あなたを恐れるすべての者と、あなたの戒めを守る者とのともがらです。」「友です」と言います。彼の周りには敵がたくさんいました。けれども、その中で彼は、同じように神を愛し、同じように神を恐れ、同じように神に従ってゆきたいと願う者たちを心から慕い求めたのです。なぜなら、そこにしか真の慰めを見出せないからです。そこにしか励ましが無いことを知っているからです。彼がここで言っていることは、深い、強い絆のことです。同じ神を信じる者たち、同じ神を愛する者たちだけが持つことが出来る、強い絆のことです。それを持っている人たちのことを著者は言っているのです。その絆は人々に励ましを与えます。人々に希望をもたらします。

詩篇の著者はよく分かっていました。世を愛することは神に敵対することであり、世の友となることが神を敵とすることだということを。敵に囲まれている中で彼は、その問題を解決するために妥協に妥協を繰り返して、世の中と仲良くしていこうとはしなかったのです。そのようにして問題の解決を求めたのではないのです。彼が求めたのは、神を喜ばせようとして生きているその人たちと、たとえ、迫害されようとも、たとえ、困難がそこにあるようとも、励まし合いながら生きていこうとすることです。皆さんありませんか？皆さんが傷ついたときに、困難を抱えているときに、いっしょに祈り、みことばからの励ましを与え合うことが出来る信仰の友がいることがどんなにすばらしいものか…。

ちょうど、ダニエルがネブカデネザル王の夢を解き明かそうとしたときに、三人の友人たちのところに行っていっしょに祈ろうと言ったのと同じように。エリヤがバアルに仕える者たちが余りにも多いのを見て、もうどうしようもないと思ったときに、神が「実は、七千人の人たちがわたしにまだ仕えている。」と言って励ましを与えたのと同じように。私たちは同じ神を信じ、同じ神を愛し、同じ神を恐れ、同じ神に従っていきたく願っている者たちのうちに、励ましを見出すことが出来ます。神はそのように、私たちを恵んでくださっているのです。そのように私たちに信仰の家族を与えてくださっているのです。真の慰めをもたらす関係は、一人一人が神とどのようにつながっているのかに係ります。「あなたを恐れるすべての者と、あなたの戒めを守る者との」友なのです。神との関係が先にあって、その関係のゆえに、私たちは深い確かな絆を持つことが出来るのです。

## 2) 神の恵みを被造物に見る

でも、その関係だけに助けを、希望を見出すのではありません。著者は被造物のすべてに神の恵みを見ることが出来るのです。64節「主よ。地はあなたの恵みに満ちています。」と。神学的には一般恩寵と言われることです。神は良いものにも悪いものにも恵みを与えます。いのちを与えてくださいます。雨を与え、太陽を昇らせ、その日その日の必要を与えようとしています。神は、すべての被造物を通して、神はいかに恵み深くあわれみ深い方であるかを教え続けています。それを見たときに、著者は気付くのです。イエスが言われたことです。「あなたたちは心配しなくていい。空の鳥を見なさい。野の花を見なさい。神さまがあのような小さなものたちにも必要な食べ物を与え、必要な栄養を備え、雨を与え、水を与えてケアをしているのを見たら、それよりもはるかに大切なあなたたちに対して、良いことをなさらないことがあるだろうか？」と。

皆さん、神を心から愛し、神に心から仕えようとしている者たちに、神はひどいことをなさると思いますか？私たちの神は意地悪な神ですか？私たちの神は、神を愛する者をいじめることを喜ぶ神ですか？違いますね。そのような神を聖書は教えていません。私たちの神は、主を愛する者を心から愛し、主を愛する者、主に仕える者に祝福を与える神です。そして、この著者は言うのです。「周りを見てごらんください。これだけすばらしい恵みが溢れているのを見たら、神が私たちを愛してくださっているという事実に基づいて、私たちが神に良くしてもらわないはずがあるだろうか。」と。私たちはこのことをこの詩篇の著者よりも大胆に言うべきです。なぜなら、私たちはもうすでに、神がどれ程私たちのことを愛してくださっているのかを知っているからです。ご自分の御子を私たちの罪のために犠牲として与えることも惜しまない愛をもって、私たちを愛してくださっていることを知っているではないですか？それなら、私たちはどうしてあらゆるときに、この神の恵みを見ることができないのでしょうか？どうして私たちは、この神が私たちを愛して止まないことを感じる事が出来ないのでしょうか？著者は言います。「周りをごらんください。あなたたちの友が、あなたたちの周りにあるすべての被造物が、神がいかに私たちを愛と恵みをもって接してくださっているのかを教えてください。」と。

そして、最後にこのように付け加えます。「あなたのおきてを私に教えてください。」と。なぜ、このようなことを言うのでしょうか？私たちが神のみことばを学べば学ぶほど、神のことを理解すれば理解するほど、神がどんなにすばらしい計画をもって私たちを愛し、私たちを養い、私たちを導き、私たちを助けてくださるのかを知れば知るほど、私たちは神の恵みに気付きませんか？周りを見て感謝することが増えませんか？それが、この著者が願っていることなのです。「どうぞ、あなたのおきてを私に教えてください。私たちの周りにあるすべての事柄を、あなたの教えに沿って理解することが出来るように助けてください。」と。それだけが、私たちの人生のあらゆる状況を、正しく判断することが出来る鍵だからです。だから、彼は祈るのです。「主よ。みことばを教えてください。」と。

ある一人の牧師がこのようなことを言いました。「クリスチャンは二つの目を持っている。一つは『肉体的な目』で、もう一つは『霊的な目』です。肉体的な目は、この世に起こる様々な事柄をそのまま見るけれど、起こっている状況のままに見るが、霊的な目は、それが実際に、本当はどのような意味を持っているのかを理解して見る。」と。つまり、肉体的な目は、私たちの周りに悪者の網がたくさん巻き付いていることだけしか見えないのです。「私の前にはこんな問題があります。経済的な困難、人間関

関係の問題があります。体調が悪いのです。いろんな悩みがあります。分からないことがあって、こんな複雑な問題の中にいるのです。」と、それしか見えないのです。でも、霊的な目は、それがいったい何ために与えられるのかを見ます。霊的な目は、なぜ、それらが自分の人生に必要なのかを理解することが出来る目なのです。そして、神がどのようにその問題を解決することが出来るのかを教えてくださいと知っているのです。

皆さんの目はどんな目ですか？皆さんはどちらの目を使ってものを見ますか？皆さんは、自分が実際にこの現状で見る事が出来るもののみを見ていますか？それだけを見ているなら絶望しませんか？今の世の中、悲しいことがたくさんあるではないですか？先に進んでいくことが出来る希望なんて、どこにもなさそうに見えるではないですか？これから日本がどうなっていくのか？これから自分たちの社会がどうなっていくのか？そんなことが全く分からない不安な中でしか生きられない社会ではないですか？皆さんは、それだけを見ていますか？

それとも皆さんには、霊的な目がありますか？クリスチャンの皆さん、皆さんには霊的な目があります。なぜなら、神がもう与えてくださったからです。皆さんは、そのような問題を抱える中で、その目を使って見えていますか？神がなぜこのようなことをされるのか？それを理解しようとしていますか？みことばを教えてくださいと言いながら、そのように見えていますか？私たちクリスチャンには霊的な目が与えられています。霊的な目を持っているのです。霊的にもものを捉えることが出来るのです。でも、残念ながら、私たちの視力を測るなら0.03位かもしれません。霞んでぼやけて何も見えないのです。霊的な目を持っていると言いながら、そこに何かがあるのだろうと分かるのですが、はっきりと見えないのです。それでは役に立たないですね。

でも皆さんは、霊的な視力を2.0にすることが出来るのです。どのようにしてできるのでしょうか？みことばが教えてくださいます。神によって聖書を教えてもらうことです。神の真理を知って、その真理に沿ってすべてのことを判断することができるようになるまでです。皆さんにはそれが必要であるし、私にもそれが必要です。私たちはそのように生きていくことが必要なのです。

詩篇の著者と同じように私たちも言わなければいけません。「主よ。どうぞあなたのおきてを私に教えてください。」と。そのようにしていくときに、私たちはなぜ神が私たちの上に様々な事柄を起こして下さるのかを理解することが出来るようになります。そのことを十分に知ることがなくても、神に信頼して、神の助けに期待しながら、希望を持って前に進んで行くことが出来ます。

クリスチャンでない皆さん、皆さんにその希望がありますか？皆さんには、前に進んで行く勇気を持ち続けることが出来ますか？先に何が残るか分からない中で、皆さんは何を信頼して生きていますか？自分の力ですか？自分の持っている様々な能力ですか？世の中で勝ち得ることが出来る様々なものですか？それらがいかに信用を置くことが出来ないものであるのかを、本当は皆さんはよく分かっています。自分の弱さを、様々なものの信頼性のなさを。皆さんは何に希望をおいて生きていきますか？

神は言われます。「わたしはあなたの所有物になる」と。その神をぜひ信じて欲しいと思います。そして、信じている皆さん、そのような生き方をしましょう。神は私たちの受ける分です。この方の恵みは弱い私たちに十分なのです。